

『人間成熟の道筋』

——八相成道をめぐる——

岡本 英夫

NHKラジオ第二放送「宗教の時間」

平成十九年五月二十七日放送

聞き手は金光寿郎さん

(放送分に加筆したものです)

金光…昔、私は八相成道のお話を聞いている中で、お釈迦様が兜率天というところから降りてこられて、摩耶夫人のお腹に入られて、それから右の脇腹から出てというようなのは、現実離れしているような気が最初の頃はしていました。

だんだん仏教のお話を聞いてみると、これは神話的なようなことで、ある教法をなさっているのではないかと気がするわけです。今日はその辺のところを、岡本先生はこう思っているというようなところ

で聞かせていただければと思っています。

岡本…私も以前そういうことをお聞きしていましたが、二十代から仏教の教えを聞き始めるようになってみて、特に『仏説無量寿経』という経典の中に「八相成道」あるいは「八相化儀」と名づけられている教えが出てくるわけです。

金光…化儀というのは、文字にすると教化の化、化けるという字に、

岡本…「人」偏の儀です。

金光…これは意味としては

岡本…教化の教えです。儀は教えです。

その「八相成道」の教えに触れてみまして、またそれについての受けとめもいろいろお聞きして、大変驚いたのです。以前は、経典の教えだけれど経典に依らず、先入観で考えていたのだなと思いました。

まず、「八相成道」の内容はお釈迦様のご生涯の伝記です。この内容が『無量寿経』という経典の中で

どのような位置づけで提示されているかという問題です。お釈迦様のご生涯であると同時に、ただそれだけではなく、もし『無量寿経』の教え、即ち阿弥陀仏の本願の教えに出会ったならば、どんな人も皆このような生涯を送るのだという位置づけで出されているのです。これは大変驚きました。

そうしますと、何かお釈迦様だけを特別な存在として崇めていくということではなくて、お釈迦様も私たちと同じとか、私たちもお釈迦様と同じ救いを得るのだと。即ち、救われて生きる者の生涯の内容、質というものはお釈迦様も私たちも同じなのだ。また、同じでなければ救われるということはないのだということですね。

人は皆そこは同じなのだ。このような非常に強いメッセージがそこに発せられているということになります。そういうわけで、お釈迦様は私たちの先輩、大先達なのです。それを仏教では諸仏という表現で表わすのですね。

したがって、阿弥陀の願いを、私達はそのような具体的な諸仏の方を通してお聞きして、そして共に阿弥陀の大きな国を生きていこうと、こういうことだったのだということを知らされて、大変驚いたよ

うな次第です。

ではその生涯、「八相化儀」というように八つの生涯の場面が教えになっていますが、実際にどのような生涯なのか。お釈迦様も私たちも、どういう生涯を生きることになるのか。それを一言でいえば、迷いを超えるということを示されています。

最初の方に、經典の言葉では「神(じん)を母胎に降(くだ)す」という言葉があります。お釈迦様自らが自らの意志で、母親のお腹の中に入っているかたという、このような表現があります。これも大変驚く表現ですけれども。

金光：…自分の意志で入られたのですね。

岡本：…そういうことです。普通私達は、誕生と言えば、お腹から出るところから始まるわけです。お腹から出て、それ以降の人生においていろいろと迷って、結局、自分の人生を受け止められない。特に若い頃などは、「なぜ、この自分を生んだのか」と

金光：…それとは全く正反対ですね。

岡本・・・そうですね。若い時にそのような思いが起る。そしてその答えが見つからないまま進むと、ひよつとすると一生涯、それほど口には出さなくとも、その思いが続いていくかもしれない。折角生まれたにもかかわらず、自分で自分を受け止められないまま生涯が終わるといって、大変残念なことになってしまふわけです。そのような生き方をなさしめているものが「迷い」であるということです。

この迷いを超えていくためにあるのがその人の生涯そのものなのだ、生涯の全体が迷いを超える道場なのだ、ということでお釈迦様の生涯が描かれるわけです。若い時は宮殿で文武両道を学び、人生に疑問・矛盾を感じ、出家して、大変な修行の果てについて成道をなさって、さらにそこで止まらずに転法輪という、教えを説いていかれるという。

金光・・・法の輪を転ずると書くわけですね。

岡本・・・そういうことです。そしてその転法輪が事實上、ご生涯の半分以上の時間を占めることになるわけです。そのようなご生涯を送られていく中で、迷いを超えるということは具体的に、どこでどのよ

うになされたのかということが、大きな問題になってきます。

私は以前、よくわからない時は、三十五歳の成道で悟りを開かれたということですから、そこでお釈迦様はすべての迷いを超えられたと思っていました。一般にそのように思いやすいかもしれませんが。私もそう思っていたのですが、どうも『無量寿経』の教えはそうではない。

と申しますのも、お釈迦様が誕生直後に、七歩歩かれて、天と地を指差して、「天上天下唯我独尊」、「われまさに無上尊となるべし」と仰った。これはもちろん誕生直後にそういうことがあったということではなくて、結局わが人生はこのようにあるべきであったのだと、また、人生とはこのようにあるべきなのだということ、生涯の最初の時点に遡って表明されたということだと思います。

七歩歩いたというその時に、「光明顕耀にして普く十方を照らし、無量の仏土六種に震動す」。光明が輝いて大地が震動したという表現があるのです。これは人間と生まれて一生を生きる、その最大の課題は七歩歩くことなのだ。これが六道という迷いで

その六道を超えるという。迷いを超えるというところが人生の最大根本の課題なのだということをお釈迦様がこのように宣言された。すると、大地、大自然・全世界が、「その通りだ」と証明し、讃嘆した。このことがあつて、お釈迦様のご生涯が始まっていくわけです。

ですから、これから始まる生涯の中で、いつ「光明顕耀にして普く十方を照らし、無量の仏土六種に震動す」ということが起こるのか。これが起こった時が迷いを超えた時になりますから、経典を読む私たちにおいても、そこは興味津々のところになるわけです。

やがて出家なさり、ついに成道、正覚を開かれるのですが、ではそこで本当に迷いを超えるという生涯の目的がすべて果たされたのかというと、「光明顕耀」の言葉はそこには出てきません。出るのはさらに先のほうなのです。

先のほうで、今度は本当のというか、まさに迷いを超えたその時に、「よくやった」といいますか、「これこそが本当の生きる目的であったのだぞ」と世界全体が証明し感動するという、実際のその場面がついにやってくるのです。それがどういふ時かと言

ますと、「魔」というものを真に克服した時なのです。

金光：・悪魔の魔のことですね。

岡本：・西洋で言う「悪魔」とは違いますが、人間自身が内に持っている煩惱の心ですね。求道心を奪うものです。これはお互い私たちの心の底にある、私自身の心なのです。この魔が結局迷いを超えることをずっと邪魔してきたわけです。

そこで、生涯にわたつて、求道の歩みに即して、魔との交渉のあり方、魔との闘い方、そのような関係のあり方が変わってくる。それが魔を真に克服していく過程になっていくわけです。

最初は魔によつてやられていた。しかし、その人生に矛盾を感じて出家した。出家は生涯をかけて魔を克服するぞという宣言です。魔を克服し迷いを超えることをもつてわが人生とするのだと自ら自分の人生を決定したのです。そして修行し、苦行して、魔を超えようとして、ついにその魔を超えることが一応できた。

しかしそれは直接苦行をすることによつてではありません。苦行によつて得られたことは、自分の力

では超えられないことに気づいたということです。自分一人の悟りを求めては魔は超えられないのだと気づき、山を降り、同じ存在である皆と共に救われる道へと歩みを変えられた。そして得られたのが先ほどの成道です。

その時の表現が、「制するに智力をもつてし皆降伏せしむ」。お釈迦様ご自身が、自分は本当に悟りを開き真実を見極めるぞという、その強い願心から放たれる智慧の力によって、魔を降伏させたのです。「制するに」制御し押さえるのです。智慧の力で魔を押さえて降伏させた。それによって成道というものになったといえます。

金光：…そうしますと、普通は私達は、ああしたいこ
うしたいという欲望に、どちらかという引きずり
回されるといふか、あれもしたい、これもしたいと
いう方向に行きたがるわけですが、それと、そちらの
方向ではなくて、私はそちらへは行きませんよと。
それを超えるといふことは、そういう煩惱の言うこ
とを聞かないで済む、そういう境地に出られたとい
うふうにも考えてもよろしいでしょうか。

岡本：…そういうことです。だからそこはお釈迦様
は、ずいぶんと苦しまれたところですよ。しかしその
成道で正覚を開かれたという時点では、『無量寿経』
の表現では「降伏させた」とあるのです。降伏とい
うのは、私達は普通の場合には・・・

金光：…降参ですよ。

岡本：…降参なのです。戦いをして降伏させた。し
かし普通の戦いを見ても、降伏をしたからと
いって、本当にこちらの味方になったかという
なかなかそうでもないことが結構あるわけです。で
すから次の戦いの時には、その降伏した者を先頭に
立てて敵に向かわせ、忠誠を確認するという
ことをやったりするわけです。

お釈迦様は悟りを開かれた後に、自己の悟りのみ
で終わらず、人々に教えを説く転法輪を生涯にわ
たつて続けられる。本当に生涯の最後まで続けられ
たわけです。

その転法輪を生涯続けられたということをもって、
「光明顕曜にして普く十方を照らし、無量の仏土六
種に震動す」と、ここにこの言葉が登場し、ここで

初めて、先ほどの誕生直後の人生を決定付ける宣言が具体化するのです。

ではその時に、魔はどうなったのか。成道以降、魔はどうであったのか。転法輪を生涯続けられたことによつて魔は「帰伏」するのです。帰依するので。帰依というあり方で伏する。先ほどは智慧によつて押さえつけられて、「降参した」と言っていたけれども、まだまだ魔としては本心はそうではないいつかチャンスがあれば、再び魔の本領を發揮してやろうと待ち構えていたわけです。

ところが、お釈迦様が生涯をかけて、仏教に反対する人々の中を教えを説き抜かれるという大変な歩みを買かれた、このことに会つて、「本当に参りませんでした」と魔は帰伏した。もはや「いつかチャンスがあれば仕返しを」ではなく、「本当にあなたにお仕えします」というようになつたのです。

魔というもの、いわゆる煩惱というものはなくなりはしないのですが、その人自身に帰依するものとなつたのです。本当にこれは大きな転回です。このことをもつてお釈迦様はついに迷いを超えられたのですから、「いつ超えられたのですか」ということになれば、生涯を閉じられる時ということになるで

しょう。それが煩惱を持つ人間存在の姿ではないでしょうか。

このように読めるような書き方を經典はしています。これは本当に、私自身も以前は何か先入観で簡単に思つてしまつていたということを知らされました。

お釈迦様が生涯自利の救いに立つて利他のはたらしきの転法輪をなさり続けた。そこに自利利他成就の姿がある。この姿こそ阿弥陀の本願成就の姿であり、これが魔を帰伏させる根本のものだということですね。

金光：…そうしますと、その立場から生まれた時のことを振り返ってみると、自分が頼みもしないのに生まれてしまった、というような立場では全くないところから、文字通りご自分の生涯を見直したところで、その八つの段階に分けて説明してくださいね。

岡本：…そういうことです。魔が帰伏し迷いを超えるということが本当にあつたものですから、お釈迦様はご自分の本当の主体を確立することができた

のだと。自在になられた。それを「神を母体に降す」と、自分の意志で母親の胎内に入ったのだという非常に明瞭的確な表現で表わされたのです。

母親から出る時には、人は親のすべてを引き継いで出て行くわけで、しかしそのことが子供としてはなかなか受けとめられず、生涯反感を持ち続けるかもしれない。ということは、親だけでなく自分自身を受けとめることができないままで生涯が終わるといふ、空しくも甚だ残念、親に対しても申し訳ないことになるのです。

「すべて受け止め担って参ります」「何ものをも怨みはしません」「私の意志と願いで生まれ出ていくのです」「生み出してくださいありがとうございます」「生み出してください人生を力いっぱい生きていきます」と。このように表白し生きることができるといふ、生涯の歩みをなしぬいて、ついに転回していくというわけでしょう。

金光：・そうしますと、目覚めとかお悟りという言葉がありますけれども、どこか楽なところで左団扇のところへ行つて暮らすというようなこととはどうも随分違うようですね。

岡本：・そうなのです。一般に言う救いという言葉も、何か宗教によつて、人生のどこかの時点で救われて、後はそれこそ左団扇で楽にといいことになつていくかもしれません。「極楽」という言葉がそういう考え方で関心を持たれるようになっていくのでしよう。

しかし人間の救いとは決してそういうものではなく、言い換えますと、先ほどの三十五歳の時の成道というのは、阿弥陀のはたらきがお釈迦様の上に成就し始めた時なのだ。救いというか、迷いを超えるということが本格的に始まった時点なのだということ。確実に迷いというものを超え始めた。そして生涯をかけて迷いを超え、また迷いを超えていく。

ですから今日は今日でまた魔が現れるわけですが、魔によつて攪乱され求道心を奪われそうになる私が、阿弥陀の教えを聞き、そのはたらきを頂くところに、私の中の魔が阿弥陀の本願の光によつて照らされていく。照らされることによつて魔の心を持つていくのが私という存在であることを今日一日知らされ、又照らされることによつて魔を超えていくことがで

きる。そしてまた明日は明日でと。

教えによつて魔を照らされ続け、自己の何であるかを知らされ続け、照らし出す阿弥陀の真実まごころ、願い・はたらきのあることを知らされ続ける、その歩みを生涯送ることができる身にならせていただくところに、人間の救いがあるというわけです。

そういうわけで、生涯のどこか途中で救われて、後は何も苦勞がなく悩まされることもなくて楽になつて終わるというのではなくて、生涯が仏様の願いを受け止めていくような、仏様の願いに則したものとなっていく。

自分の生涯の全体を、仏様が本願を成就される仏道の道場として仏様に提供し、また自分の生涯の全体を、私自身が救われる道場として仏様から賜つて歩む、そのような歩みを為さしめられていくところに、救いがあるのだと思います。

金光：有名な言葉で、お釈迦様の最晩年に「自らに依れ」と「法に依れ」という言葉がありますね。普通自らというと、自分の思うように、今の人だと「自分の主体性を持つて」みたいなことを誓いますけれども、どうもそういう我が思い中心の生き方ではない。

法あるいは阿弥陀さん、如来の世界に自分が生きるという。だから自分が会つたその世界の中に入つてしまう、そういうニュアンス。

岡本：そういうことですね。救いというのは、継続的なものだと思うのです。どこかで救われて終わるというようなことではなくて。

金光：生きていますからね。

岡本：そうですね。ですから、煩惱の存在、魔の存在です。それから、それを真実の光によつて、今日も照らされ、明日も照らされていくと。その照らされていくということが、本当に続けてやっていけるといふところに、救われた身というものがあるのだといふことではないでしょうか。

金光：八つの節目に分けて説明して下さつていくわけですが、それはやはり人間が一つ気づいて、「ああ、今まで間違つていた。こちらのほうが広い世界だ」といふふうにながつく、その辺の節目節目のことを、そういうふうになつてわかりやすく八つに

分けてあるというようなことでしょうか。

岡本・・・そうですね。その八つの中で、それぞれ大きな意味があると思いますが、特に二つに分けるようなところが、出家のところなのです。

私たちは教えによつて直ちに救われるというわけには行きません。やはり私には私なりの歩みというものがある、いろいろなことに疑問を感じ、自分は本当にこれでいいのかと自己自身に問いを向けて、そして自分の現状から何とか立ち上がつて、本当のもの、真実なるものを求めていかなければと、そういう思いを起させるものが教えなのです。

さらにその後そういう迷いを本当に超えて歩ませるような教えがさらに説かれてあつて、生涯その教えを聞いていくということが、私たちの何か必須の為すべきことという思いがいたします。

金光・・・先ほど「気づく」というようなことを言われましたけれども、これは自分のエゴが、いわば如来のおはたらきに頭を下げてしまうというか、自分が「私のこうしたい、ああしたいというのは、どうも大変間違つておりました」という、一種の懺悔といい

ますか、そういうことが、一度目覚めたらそれで私にはわかつたということではなくて、また「間違つていたな」というのが一度だけではないような気がします。

岡本・・・そうですね。その気づくということができる、そうなるということは、私自身の存在のいわば一番根本のところだが、ついに教えの光によつて照らし出されてきたという。そこで初めて頭が下がるということではないかと思ひます。

それはなかなか最初からはそうはならないでしょうから、一日一日教えを聞いて、光によつて照らされていく歩みというものが実際に為されなければならぬ。そういうことになるでしょうね。

金光・・・よく世間で誤解している方の言葉だと思ひますけれども、「他力はダメだと。人任せみたいだ」と理解している方も結構おいでるようですけれども、今までのお話、成道、目覚め、自覚ということとは、人様に任せるのとは正反対ですね。

岡本・・・そういうことなのです。他力というのは、

真実の光、真実のはたらきというものを他力というわけです。私自身が自分の領域の中でいろいろやつても、結局自分の一番根本の過ちというものは、自分で否定できないわけです。

金光：我執の塊ですから、自分の都合のいいことしか考えないですよ。

岡本：そういうことですね。その我執の一番奥のところだけは残して、ということにどうしてもなってしまうわけです。その根本の我執を含めて、私の全体に対して光で照らし、照らし破るようにはたらきかけてくるものが真実の光。それを他力というわけです。

ですからそのはたらきを受けることがなければ、私たちはついに根本の我執に最後まで振り回されて、迷いを超えるということができない、ということになるかと思えます。

金光：そうしますと、その八相成道の中で、今は出家の場合もありますし、魔とのやり取りというものから、最後の涅槃に入られるところまであるわけで

すが、それはやはり、自分自身の別の世界にいい生き方をしている方がいらつしやつて、そのお釈迦様に見習いましょうというようなことだと、その離れたところの世界になつてしまいますでしょう。

岡本：そういうわけで、本当にこれはお釈迦様だけのことでなくて、私たちもまた、この教えを聞けば、誰しもこのような生涯を歩むのだと。その典型のモデルのようなものとして、お釈迦様のご生涯が出されてあるわけです。

それからもう一つ、お釈迦様は後半生は転法輪の歩みをなさるわけですけれども、正覚を開かれ成道なさつて、その直後のことですね。これは有名なことですが、教えを説くことを躊躇されるわけです。実際には躊躇以上に絶望なさつたと言われます。このところは大変大事なところがあるように思えます。

なぜ説くことを絶望なさつたのか。不思議なことのようにも思えます。その理由は、自分が悟つた法は、人々の我執の心を打ち破る教えなのだ。それは当然のことです。ところが人々はその我の心をこそ自分にとって一番大事な命のようなものとして生

きている。それを打ち破られては大変だということ
で、もし仏法が説かれれば皆逃げていくであろうと
いうわけです。これでは説くことができないと。

その時に、もしそれで終わっていたのであれば、
今日仏教はなかったわけです。その時に、『無量寿
経』が説く表現では、天人達がお釈迦様のところへ
行ってお願いをするので。「どうか説いてくださ
い」とお願いをするので。その天人とは一体何者
かということ。これが結局私たちなのだ。私
たち全ての者です。

それは三千年前のインドのことですけれども、い
わゆる時間と空間を超えて、教えを説かれて照らし
出されては困るその我執の心よりも、ある意味で
もっと深いところの、私たち人間存在の一番根底に
ある「真実に会いたい」という根本の願いが、天人と
なってお釈迦様のところへ行つて、躊躇、絶望され
るお釈迦様に、「そうではないのです。本当は真実の
教えを聞きたいのです。」と言つてお願いをした。
そこから初めて説かれた教えが仏教なのだといふこ
とです。

そうしますと、私も以前は、仏教というの自分
と一体どういう関係があるのかと疑問を持ち反発し

ていたのですが、だんだんそのようにお聞きしてき
ますと、この教えはまさに私が、しかも私の存在の
一番深いところの願いが、お釈迦様をお願いをして、
それによつて説いてもらった教えなのだ。まさに
私のための教えだったのだということ。だんだんと
知らされて来まして、なるほどこういうことだった
のかと。

金光：…ということ、これは一度読んで、今の現実
とは、科学の時代の現実とは全く離れているではな
いか、みたいなどころで読み捨てている間は、これ
はなかなかピンとこないのでしょうけれども、何回
もお話を聞いたり、読みなおしているうちに、だん
だんとそこにある意味みたいなものが自分のことと
して感じられてくるということ。ごさいますか。

岡本：…そういうことだと思えますね。実際に教え
を聞くということがポイントです。教えに触れる方
法は、基本的にいろいろあると思います。経典やそ
れに関する書かれたものを読むということもあるで
しょう。しかし、一番本来の姿は「聞く」、いわゆる
「聞法」です。法を聞くということ。私自身の

心の奥の、私の心と言いますか、そこまで教えが届いてくださるように聞いていく。聞き聞いていく。

私が教えの前に出ずに自分の枠の中で思弁的に考えても、阿弥陀の本願というもの、又自己自身というものはよくわからないのです。我が身を引つ提げて教えの前に出、頭を下げて聞き、ついに聞き開くということが大事だと思います。この行為はきわめて具体的な行為ですね。

この聞法をするためには「自己をなおされる」ことが基本としてなければなりません。若い時はずっとかくも、次第に歳をとれば人からなおされたくないものです。人に対してだけでなく、仏様に対しても我を張ってなおされようとしなさい。この我慢の心が聞法をさせないので。頭を下げて教えを聞く。簡単なようではなかなか難しい。しかし、このことが人を変える鍵だと思います。

そして私の心が、次第に光によって照らし出されてくると、この教えはまさに私のための教えであったのだということが領けてくるのです。このことがないと、仏教はいつまでも遠くにあるようなものと思えるかもしれません。

金光：…そういう意味では、これは我が身のための、自分のための教えを、しかも自分の心の底には、あなたも皆、心の底にはこういう願いがあるので、ということに気づいた人が話された言葉であると。

岡本：…そういうことでしょうね。

金光：…どうもありがとうございます。

岡本：…ありがとうございます。

(終わり)